

第12回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議 協議内容（委員発言要旨）

【開催日時】 平成29年8月7日（月） 午後2時30分から午後4時28分まで

【開催場所】 宮城県行政庁舎 4階 特別会議室（仙台市青葉区本町3-8-1）

【報告】

- ・ 平成29年度「幼児教育に関わる実態調査（アンケート）」の結果について（資料1）
 - （質問）・ 2-4「朝食の内容について」の設問の回答割合を全て足しても50%にしかならないが、それ以外の回答はどのようなになっているか。（川島座長）
 - 代表的な3つの回答のみ棒グラフで表記している。
 - （意見）・ 「朝食の内容」や「外遊び」について0歳児を含む値では目標値が異なってくるのではないか。（川島座長）

【協議】

- ・ 第3期「学ぶ土台づくり」推進計画（素案）について（資料2-1）

★ 第1章から第3章について	
佐藤委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1ページ目の書き出しで「幼児期は、親子間の世界に限定された・・・」とあるが、乳幼児施設で過ごす子もいる現状を考えると「親子の世界を中心に」のような柔らかな表現にした方がよいのではないか。 ・ 4行目の「学ぶ力の源となる好奇心や探究心・・・」とあるが、改訂となった幼稚園教育要領の議論の中で、持続力やねばり強さの大切さも言われているので、そういう文言も入れていくことが必要ではないか。 ・ 「新しい教育要領が適用」とあるが、「実施」という文言にしてはどうか。 ・ 全体の表記の仕方として<>（不等号）を使っているが、∪（山括弧）が正しいのではないか。
杉山委員 ※文書で回答	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1章の5からは、幼児教育は乳幼児を対象とするものと読み取れるが、1では、乳児期と区別された幼児期の教育を対象とすることを予測させる内容であり、用語の整合性がとれていないのではないか。 ・ 保育所等で実施されている乳児保育をどう捉えているのか。
★ 第4章 施策の展開 目標1「親子間の愛着形成の促進」について	
川島座長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 15ページの上から2つ目「親子のかかわり方や『遊び』についての研究」は県教育委員会が行うのか。もう少し具体的な言葉にしていくとよいのではないか。 ・ 父親の育児参加の促進は誰がどういうことをするイメージでいるのか。ライフ・ワーク・バランスの関係で誰もが正しいと思っているが具体的な戦略が難しいところなので、知事部局と連携するだけでなく県教育委員会としてもきちんとした戦略をもつ必要がある。 ・ 親子間の愛着形成においては、母子手帳を取りに来る段階から教育委員会に関わるという実効性を感じられる取組が必要である。

	<ul style="list-style-type: none"> 「ノー携帯・ノースマホ」の日については全国でもあまりうまくいっていない取組であるので、県としては親子団らんの時間に「ノー携帯・ノースマホ」の運動を推奨する形で、より具体的で効果のあるものに転換できるとよいのではないか。
中鉢委員	<ul style="list-style-type: none"> 親子間の愛着形成の促進の中に、子育て支援という項目を入れるとよいのではないか。 15ページの「将来の『親』育て」では、学校教育だけでなく社会教育など全ての教育を通じて行うことが必要なのではないか。
新山委員 ※文書で回答	<ul style="list-style-type: none"> 我が子の表情を見ての「抱っこ」や「会話」の大切さなど子供と向き合うことの大切さも啓発したい内容ではないか。
星委員	<ul style="list-style-type: none"> 14ページの施策1の「家族行事」という言葉があまり馴染みがないので表現を見直した方がよいのではないか。
太田委員	<ul style="list-style-type: none"> 家事への積極的な参加に関して、良い習慣を身に付けるという意味で具体的な取組の記載を入れ、実践につなげることが必要ではないか
伊勢委員 ※文書で回答	<ul style="list-style-type: none"> 漫画で会話形式や具体的な先輩ママからの声、将来への影響などを盛り込むなど、届けたい方々へ伝わる啓発用パンフレットにしてほしい。 研修会については、理論も大切だが同時にすぐ役に立つスキルを学ぶなど学び方の工夫が必要である。 発達段階に応じたコーチングや具体的な声掛けの方法などを学べたらよいのではないか。さらに、気軽に話せるようなカフェタイムのような時間を入れることも必要ではないか。
鈴木委員	<ul style="list-style-type: none"> 情報発信する媒体については、テレビを加えた方がよいのではないか。
<p>★ 第4章 施策の展開 目標2「基本的生活習慣の確立」について</p>	
川島座長	<ul style="list-style-type: none"> 社会総がかりでの取組と考えたときに、意識の高い家庭以外の家庭へどのように情報を届けるかが大事なポイントであるので、そこに対する施策をどうするか表現できるとよいのではないか。 指導する側の教員や企業の人事担当者が、本当の意味で基本的生活習慣の大切さを理解し、熱心に指導しているのか疑問である。指導者の意識を高め、情報発信のリーダーを増やすといったことを文言化するとよいのではないか
松ヶ根委員	<ul style="list-style-type: none"> 17ページの3つめの取組で「幼稚園・保育所・認定こども園等に対して・・・家庭における食育を補完する・・・」とあるが、補完の意味が分かりにくいので具体的な表記をするとよいのではないか。
中川委員	<ul style="list-style-type: none"> はやね・はやおき・あさごはんの励行のところで、幼稚園で行う紙芝居演劇やルルブルロックロ〜ル♪教室だけでなく、家庭でもできるルルブルチャレンジ表のようなもので継続して楽しく取り組めるものを入れるとよいのではないか。
田中委員	<ul style="list-style-type: none"> 基本的生活習慣の確立について、分かっているけどできない人への情報発信をどう行うかが難しい。アンケート結果を見ても幼稚園や保育所から情報を得ている保護者が多いことから考えると生活習慣づくりに関する家庭支援の充実について教育現場の役割は大きいので、表記の中に教育現場の役割を明記するとよいのではないか。

伊勢委員 ※文書で回答	<ul style="list-style-type: none"> 食の重要性はこれまでも大切にされてきたが、これからは消費者が賢くならないと子供の体と脳の発達に大きく影響するのではないか。「食育」と「生活するための知恵」が必要ではないか。
★ 第4章 施策の展開 目標3「豊かな体験活動による学びの促進」について	
川島座長	<ul style="list-style-type: none"> 現実には公園で遊ぶ子供の声がうるさいというクレームがくるというような問題もあるが、宮城県として、日中子供が元気に声を出して遊ぶのが目指す社会であるということを社会啓蒙する理念を示すことができるかよいのではないか。
杉山委員 ※文書で回答	<ul style="list-style-type: none"> 集団遊びの促進については、幼児の場合、集団遊びが成立し、楽しめるためには専門性を持つ大人の援助の下、繰り返し経験できることが重要ではないか。具体的な展開をどのように考えているのか。
塚原委員	<ul style="list-style-type: none"> 豊かな体験活動として総論としてはよいが、各論としては体験活動の意味や質を理解していないと「何もしない」体験プログラムなどは、ただ放っておけばよいと解釈する指導者もいる。幼児が遊びこむことの意義や指導者の関わり方など具体的な指導の質や意味を表記してもよいのではないか。 コンテンツとしてはあるが、その体験の意味をどう価値付けするか具体例やヒントがないと伝わらないと感じる。 遊びの環境づくりでは、自然体験は安心と安全とぎりぎりの境界線であるが、具体例を示し、安全安心が大人の枠組みの中で捉えられないようにするとよいのではないか。
★ 第4章 施策の展開 目標4「幼児教育の充実のための環境づくり」について	
佐藤委員	<ul style="list-style-type: none"> 臨時・非常勤職員の数が増えており、その方たちを含めた研修の体制をどう構築していくか、補助金を出すなどインセンティブな方策を具体的に考えていく必要があるのではないか。 幼・保・小連携の一つの施策で、小学校区とあるがこれは本当に第1歩である。小学校区の次は中学校区に発展させていき、横のつながりで情報交換や課題追求、さらにはこれから親になる中学生がインターンシップのような形で幼稚園児と触れ合うなど新しい取組ができるとよいと考えている。
松ヶ根委員	<ul style="list-style-type: none"> 幼小接続期カリキュラムのところに「スタートカリキュラムのモデル例の作成」とあるが、幼稚園側の「アプローチカリキュラムのモデル例の作成」についても考えてほしい。
中鉢委員	<ul style="list-style-type: none"> 施策8に関して、幼保連携型認定こども園の保育教諭という職があるので、ぜひ加えてほしい。 キャリアアップ研修に関して、不公平感のない、一斉に底上げするような制度にしてほしいと考えているので、県としても早めの方針を出してほしい。
新山委員 ※文書で回答	<ul style="list-style-type: none"> アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの双方がそろって円滑な接続に効果を発揮するものと考えてるので、文言にアプローチカリキュラム作成を含めた方がよいのではないか。

<p>熊谷委員 ※文書で回答</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 施策8(1)の3つ目は「各市町村における幼児教育アドバイザーの育成・配置を支援するとともに、幼児教育アドバイザーを活用し、園内研修の活性化やアウトリーチ型の研修の推進を図ります。」の方が物事の順番として合うのではないかと。 ・ 4章は他の章に比べて、カタカナ言葉や専門用語が多いと感じるので、様々な立場の方に読んでいただき、理解・啓発を図るために、できるだけ平易な日本語に統一した方がよいのではないかと。
<p>★ その他</p>	
<p>塚原委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ AI(人工知能)ができ、知識的なものはどんどん機械が肩代わりしていくようになっていく。逆に転んだらとっさに手をつくとか、入った部屋を瞬時に部屋と認識するなど、AIにとって苦手な部分もある。そういった部分は人間らしい脳の得意なところである。こういう能力は幼児期の豊かな経験により育まれる。幼児期には教育で何か知識ばかりを与えるというのではなく、子供たちが主体的な遊びや体験を通して、自ら学ぼうとすることを大事にしたい。AIにとって5歳児の脳は再現することが難しいという。まさにそれは、幼児期特有の成長や学びは人間として大切なことを獲得する時期である。まさに「学ぶ土台づくり」の意義があり、もっと深めていく部分ではないかと。 ・ アンケート結果の「子育ての悩み」の中に、「自然体験の不足」という回答が一番少ないが、これは体験に対しての問題意識がないために少ないのではないかと考える。学ぶ土台づくりでもっと自然体験の大切さを伝え、親に問題意識を持たせることが必要ではないかと。 ・ アンケートで栗原圏域の自然体験に関するイベントの認知度が低いと、国立の施設もある圏域であるのでもっと体験活動を広めていきたい。
<p>新山委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会総がかりで次世代を育てるところで、多種多様な幼児教育施設があるので、認可外保育施設も視野に入れ、今回「小学校区」という言葉も入っていることから、幼稚園・保育所だけでなく認可外保育施設、そして私立も含め、小学校から学びを発信していかなければならないと考える。 ・ アンケートのお手伝いの回答は、0歳児等は含めず、就学前1、2年のところで目標値を上げていく方がよいのではないかと。
<p>川島座長</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目標値の設定のところ、何歳から何歳までの親に何%というようにもっと踏み込んでいく必要があるのではないかと。
<p>鈴木委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第5章の1で「一般県民」という表現があるが、「一般」の文字は必要ないのではないかと。 ・ アンケートの前回との数字の違いは、%ではなく、ポイントではないかと。
<p>吉岡委員 ※文書で回答</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚園・保育園の職員たちの質の向上だけでなく、新しい事業として地域・家庭・教育機関・行政などが一緒になって「子供フェスティバル」のような活動はできないかと。 ・ 意見を聞く調査ではなく、行動につなげる調査がほしい。 ・ 間口が広すぎて深まりが難しい。 ・ 保育所等の等に含まれるもの、教育・保育か保育・教育か、教育機関としての幼・保・小連携なのか育ちの連携なのか、はっきりするとよい。